

あー。ほんつとに、間違えたかもしねえ。アし、教えたの。絶対、今日も言ってくるぞ。

「あー……、なあ、エヴァ。奥、いっていいっ。」

ほおーらな。お前、嵌りすぎだろ。

「んー？」

「どうかされましたか？ エヴァ様」

「んー……、いや、別に何でもねー」

「そつですか」

俺の名はアダルジーザ・エヴァ・ヴァヴィロフ。通称エヴァ。年齢は二十六歳。仕事は閻医者。とは言っても、複数の国での医師免許はきっちり持っているんだが、姉の動かす諜報組織専属の為、閻医者扱いだ。ちなみに医療班の班長、つまり責任者だな。ついでに言えば暗殺者としてもエリート集団に所属できる程度には鍛えていたけど、そっちはとっくに引退した。

そんな異色の経歴ではあるが、さらに遡れば、結構エグい過去持ちでもある。俺は医学用語で性分化疾患、いわゆる半陰陽・両性具有・ふたなりってヤツで、男性器も女性器もある。どちらも未成熟で生殖能力はないんだが。そのせいで十四歳の頃に両親が事故で亡くなった時、俺を嫌々引き取った親族に売られて、薬漬けにされて慰み者にされた。……まあ、要は前後不覚にされて輪姦（まわらわ）されたんだよな。

そこを助けてくれたのが今の姉のナーシャことナスティア・ヴィト・ラフォレーゼ。血統的には大伯母に当たるんだが、国籍が違つ上に親等も離れていた俺を引き取るため、養子縁組で姉弟になった。んで、ついでにその時に戸籍の性別も男に変えてもらった。もう、性的な目で見られるのが嫌だったから。

だからその後、女性的な二次性徴を抑える為に、考えられる努力はしまくって、事によっては姉に怒られたり禁止されたりもしたけど、何とかパツと見は男で通る容姿になれた。胸も膨らまなかったし、顔は姉そっくりの女性的……いや、中性的な顔立ちだけど、背は結構伸びたしな。姉も女の割には高い方だし実の親も高めだったから、単純に家系の遺伝もあるとは思っけど。

ただ、そのうち、弊害が起きた。まあ、一種の精神疾患だな。自罰行為としての過激な性交渉を求めるようになった。嗜虐でも被虐でもどっちでもいい。とにかく、自分を責めたいんだろ。一時期はそれに悩んだりもしたが、今では割り切って遊びまくってる。とりあえずSEXしてれば、精神的にも落ち着くんだから。

セックス依存症気味ではあるけど、まあ、姉の迷惑にならず、仕事に支障が出なければ問題ないだろ。特定のパートナーも居ないし。まあ、そもそも作れないだろ(うけど)。作る気もない(うけど)。

そんな中で、姉経由でとある男と知り合った。ウチの組織と懇意にしているフリーの殺し屋の男だ。歳も同い年だし、偶然にも通称が俺と同じエヴァだった。名前自体はエヴァン・エリス・ルーヴォア。面白いからお互いエヴァって呼び合う事にしたんだが、周りの奴らが混乱しそうになって、正直、かなり面白い。姉には悪趣味だと言われたし、アディとエルで呼び分けられてるけど。

とにかく、その男と寝たら、めちゃくちゃカラダの相性が良かった。あと、スゲー加虐趣味だったのもイイ。第一に性格も性に対する価値観も合うのは、付き合えばある中で非常に楽だ。友人として一緒に居ても楽しいし、やる時もベタベタしないし、疑似恋愛を求めたり、支配欲による束縛なんかもない。

あれだ。セックスはスポーツだってヤツ？ 性欲も溜まるし、気持ち良いから好きでやるけど、精神的に何かを求めるって事はしない。普段と変わらない距離感でやるし、お互い他の誰かと寝ようが気にしない。

というか、一緒にナンパする事すらある。俺がタチや加虐性嗜好の気分の時は特に。アイツもハイだから男女は気にしないけど、DSのバリタチってヤツだからMにもならないしネコもしないし。

ちなみに俺は男女・タチネコ・SM関係なく、相手と気が合ったら寝る。まあ、俺みたいになんでも来いって方が珍しいんだ(うけど)。

まあ、そんな訳で、アイツとは良いセフレ関係を収まっている。お互い世界各国飛び回ってるけど、アイツがウチの仕事を受ける時や偶然近くに滞在してる時は積極的に連絡を取り合ってる(うけど)。

——ピンポーン

約束の日時。エヴァンの取っているホテルの部屋のインターホンを鳴らす。すると、すぐに部屋のドアが開いてエヴァンが顔を出した。そして、その顔が苦笑に変わるのを見た。

まあ、そうだろう。自分が物凄く機嫌の悪そうな顔と雰囲気を出している事は自覚していた。半分は自分勝手な都合を押し付けてくるアイツに対しての当てつけで、ワザとではあるが、残りの半分は、本当に今日の仕事でトラブルがあつて機嫌が悪かつたのだ。

エヴァンも何となくその辺りの事を察したのか、部屋に招き入れながら「詳しくは聞かない方がいいやつ？ それとも愚痴りたい話？」と尋ねて来たので「言いたくない」とだけ答えて、俺はソファ―セットへ一直線に向かった。

テーブルにはロックグラスが二つと氷、そしてウイスキーボトルが置いてあり、片方のグラスには既に酒と氷が入っていたので、躊躇なくそのグラスを一気に煽った。エヴァンが「それ、俺の飲みかけ……まあいいけど」と苦笑っていたが、完全に無視をした。

「エヴァ、今日はやたらと機嫌が悪いな。これはご機嫌取りをしろって合図？」

俺がどっしりとした一人がけのソファにぶてぶてしく座っていたら、エヴァンは向かいのソファには座らず、こちらのソファの肘掛けに浅く腰掛け、俺の長く伸ばしている銀髪を一房、手に取って軽く口付け、キザな態度と甘い声で既にご機嫌取りの姿勢を見せてくる。

それを片手で払うと、次の酒、とばかりに残っていた氷の上から琥珀色のウイスキーを注ぐ。そして、それをまたあげようとした所から伸びて来た手にグラスごと奪われて、そのまま空にされた。

「Okay, darling. 今夜は優しく甘やかして思いっきり気持ちよくしてやるから、機嫌を直してくれ」

そして、エヴァンはリップ音を立てながら、軽く唇にキスを落として「な？」と近くから瞳を覗き込んでくる。

それに視線だけで挑発を返すと、ヤツは笑みを深くして、こちらの右頬にも先程と同じように口付けると「風呂に行こう。髪も身体も丁寧に洗ってやるから。あと、マッサージもな」と、手を引いてバスルームへと促してくる。俺はそれに無言で付いて行った。

「んあっ……またっ、イッ、ク！ イク！」

バスルームには、降ってくる温かい雨だけではない熱が籠っている。エヴァンは機嫌が悪い俺の髪を丁寧洗って、次に身体、そしてマッサージュ、と言いながら、徐々に不埒な手付きになっていった。

身体を洗うだけ、と言っておきながら、一度乳首だけでイカされた。そして、その熱も冷めやらぬうちに、今度はマッサージュという名目で花芯を唾えられて、同時にGスポットと前立腺を責めてくるから、俺はひとり立っていられず、前で屈んでいるエヴァンにほほしがみついていると言えらくらい寄りかかっている。

先程に続いてまた絶頂に達しそうな事を伝えれば、そのままイク、とばかりに各所の刺激を強くするから、俺は欲求に逆らわずエヴァンの口の中に熱を放った。

「アッ！ やめっ……！！ イッてる、からあっ……！！」

吐精している間も緩めず刺激してくるから、続けて二度三度とイってしまった。流石に腰が抜けて、ずるずると座り込めば、口の中のを躊躇わずに飲み込んだエヴァンが愉しそうにこちらを見ている。

「ヨかった？」

「こちらは急が整わずに、返事するのもままならないというのに、当然ながらエヴァンはまだまだ余裕そつた。

【続きは本編で】

【奥付】

タイトル・Please, come around. —なめ、もう機嫌直してくれ。 — 【サンプル】

著者・咲良椿姫

サークル・Whimsically.

シリーズ・箱庭世界のヒトカケラ。

発行日・二〇二一年一月十七日 第五回文学フリマ京都

印刷所・プリントオン様

メールアドレス・ciel06918@yahoo.co.jp

Twitter・[@Nstda_Vitte](https://twitter.com/Nstda_Vitte)

HP・[咬み殺すよら。](http://www.kamikorosu.choumusubi.com/)

<http://kamikorosu.choumusubi.com/>

本書の無断転載・複製、オークション・フリマサイトなどでの転売は固く禁止致します。